

令和4年度 特選コース

第1回 入学試験問題 (2月1日 午前)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、神社の境内。
- 2、善良な行動に感動する。
- 3、世話になった人に深謝する。
- 4、洗顔を習慣にする。
- 5、土地を耕す。
- 6、その件はシヨウチしています。
- 7、ユウビン物が届く。
- 8、先生のテンジ会に行く。
- 9、活動費のシュウシが合わない。
- 10、ノベ三万人が訪れた。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小学五年生の「ぼく」(えだいち)は、家庭の事情から母方の祖父と二人で暮らしている。ある日、押野おしのに誘われて、海沿いにある工場へ向かった。

「えだいち、もうすぐだよ。」

押野が振り返って笑う。ぼくも笑ってうなずく。押野が立ち漕こぎになったのを見て、ぼくも真似まねをした。そんなことをしてもたいしてスピードは変わらないんだけど、気が急せいでそうしてしまった。

ぼくたちは橋を渡った。橋の下は河口になっていて、ウインドサーフィンをやっている人を、めずらしそうに何人かの人が見ている。ぼくもはじめて見るヨットみたいなものをもっと見たいと思ったけど、それよりも今は①おもちゃ工場だ。

「橋を越えたところにあるんだ。」

押野は自分に言うように、うしろを振り返らずに言ったけど、ぼくにはその声がよく聞こえた。

長い橋を渡り終えた。押野がスピードを落として、地面に足をつける。

「あそこなんだ。」

押野が指差した先には、ぼくがさつき押野から聞いたときに思い描いた工場があった。本当に押野が言った通りだ！

「すごい！ ロボットのおもちゃ工場そのものじゃん！」

「なっ！ えだいちもそう思うだろ？ おれ、ずっと気になってたんだ。」

建物は意外に小さいけど、建物の外にあるものがぼくらの目をひきつける。建物からは長いらせん状の外階段が出ていて、まるでそれは針金のバネみたいに見える。金属でできている大小の球体は、ここから見ると継ぎ目があるように思える。継ぎ目というより、縫い目みたいだ。地面からは、先のがった細長いものが何本かによきによきと出ている。全体の色はくすんだブルーグレーで、ぼくが想像するロボットの色とおんなじだ。

ぼくは、ブリキでできた四角い顔のロボットたちが、一生懸命におもちゃを作っているところを想像した。みんな気がやさしいロボットたちだ。

「行ってみよう！」

ぼくらは声をそろえて、お互いにうなずいた。

(中略)

「えだいち、あつち。」

押野が言うほうを見ると、らせん階段らしきものの一部が見える。

② ぼくたちは、足早に向かった。 そのときだ。

「おい！ なにしてる！」

びくつとした。向こうから、作業着を着たおじさんが走ってくる。

「おい、こんなところでなにしてるんだ。なんの用だ！」

背の低い痩せている男の人だった。何歳くらいだか見当がつかない。

「……見学です。」

押野が言った。

「そんなこと聞いとらん。守衛のじいさんは知っているのか。」

その人は、そう言って親指を立ててうしろのほうを指差した。どうやら、ぼくたちが来たのと反対のほうに正門があったらしい。

「フェンスのところから来ました。」

押野は、らせん階段が気になってしょうがないふうだった。

「ここは立ち入り禁止だ。お前たち、どこの小学校だ？」

どこの小学校だ、と聞かれて、ぼくの鼓動は一気に速くなった。学校に通報されて椎野先生に知らされて、おじいさんにまで連絡がいったらどうしようと思つた。③今すぐ謝つて、早く出ていきたい気持ちになった。

「A」

押野が聞いた。

「なんの工場かだつて？ そんなことも知らないで見学に来たつていうのか？」

そう言つて、うすら笑いをした。そいつはとても意地悪な大人だった。今まで見たことのないような意地の悪い大人だった。

「B」

押野が頭を下げた。心臓はばくばくだったけど、ぼくも真似して頭を下げた。

「不法侵入だな。警察呼ぶか。」

にやにや笑いながら、そいつが言った。ぼくは、もう本当に帰りたくなつてしまった。おろおろするぼくの横で、押野はまだ頭を下げたままだ。

「C」

頭を上げると同時に押野がそう言つて、階段側へと走つていった。

「おい、待て。」

作業着の男は、大きな声で言つて押野のあとを追つていった。ぼくはどうしていいかわからなくて、その場に突っ立ったままだった。足が動かなかった。どうしよう、どうしよう。

頭のなかが真っ白になった。押野が無茶をして捕まめたのかもしれない。どうしよう、どうしよう、どうしよう。

工場内はしんとしていて、ぼくはただ広い敷地に一人残されて、④呆然としていた。足が接着剤で地面にくっついたみたいなのに、この場所から動けない。どんよりとした鉛色の空が今にも落ちてきそうで、押しつぶされそうだった。

押野の声が聞こえた気がした。少ししてから、押野と作業着の人が戻つてきた。

「放せよ。」

男は、押野のTシャツの襟ぐりをつかんでいた。ぼくは本当に怖くなった。

「放せて言つてんだよ。」

押野が男を突き放した。男はあつげなく、押野から離れた。押野と同じくらいの身長だ。

「ほら、早く帰れ。そのフェンスからは出るなよ。向こうの正門から帰れ。わかったな。」

男はそう言って、そのまま歩いてどこかに行ってしまった。途中で、二回も地面に唾を吐いた。

押野はよれたTシャツを直してから、帽子を取ってうるさそうに髪の毛をほらった。

「だ、大丈夫？」

ようやくぼくは口に出した。今にも消え入りそうなぼくの声は、震えている気がした。

「うん、大丈夫。」

押野はうなずいたけど、ちっとも大丈夫じゃなさそうな顔だった。ぼくらは、あの男に言われた通りに、正門のほうへ歩いていった。押野はなんにもしゃべらなかった。なにがあったのか、なにを見たのか聞きたかったけど、声をかけることができなかった。ぼくは、自分が情けなくて仕方なかった。友達に協力したり、助けたりすることもできないなんて。

正門まではかなりの距離があったけど、いろんなことを考えていたら、あつという間だった。門のところに守衛室があった。なかには年配のおじさんがいた。

「ちよつと、君たち。どこから来たんだ。」

案の定、声をかけられた。押野は守衛さんを一瞥(いちべつ)しただけで、口をひらく気配がなかったから、ぼくが答えた。

「向こう側のフェンスからなかに入りました。すみません。」

守衛さんは、「ああ。」と納得した様子で、「鍵(かぎ)が壊れてたんだったなあ。」とのんびりと言った。

「作業着の人に怒られて、正門から出ると言われました。」

「ああ。」

守衛さんはまた納得したようにうなずいて、「あいつかあ。」と小さく言った。

「この工場は今、夏休み中なんだよ。まあ、何人かの職員は出ているがね。二人とも、気を付けて帰りなさいよ。」やさしい口調でそう言ってくれた。ぼくは、すごくほっとした。さっきの怖さが帳消しになるくらいほっとした。

「こゝ、なんの工場なんですか。」

押野が突然守衛さんに向かって、怒ったように聞いた。守衛さんは笑いながら、

「金属のリサイクルをする工場だよ。スクラップ工場(注2)と言えはわかるかな。」と答えた。

押野は「そうですか。」と言って、帽子を脱いで頭を下げた。ぼくもそれにならって挨拶(あいさつ)して、工場をあとにした。

水平線からは、大きな黒い雨雲がもくもくと出ている。ひと雨きそうな感じだけど、海水浴客は帰る気配はなかった。カップルや家族連れが多い。波がかなり高い。監視員のいる台には黄色い旗がはためいている。注意警告だ。

ぼくらはテトラポッド(注3)に座って、おじいさんが作ってくれたおにぎりを食べた。塩がきいていておいしかった。押野も「うまい。」と言ってくれた。けれど、押野の元気がないの是一目瞭然りょうぜんだった。麦茶はぬるくなって、ピンボケした味になっていた。

「さつきはごめんね。」

ぼくは謝った。押野が一人で悪者になったみたいだったから。

「えだいちが謝ることはない。おれのほうこそ悪かった。ごめんな。」

押野は無理に笑顔を作るみたいな顔で言った。

「ぜんぜん、ロボットが作るおもちや工場じゃなかったよ。」

ああ、そうだった。そんな大事なこと、ぼくの頭からはもうすっかり抜けてしまっていた。

「押野はらせん階段のところ、見てきたんでしょ？ どうだったの。」

ぼくの質問に、押野は顔をゆがめた。

「ぜんぜん。」

押野はおおげさに手を振った。

⑤「ぜんぜん思ったのちがってた。でかいタンクみたいのがあったけど、すげえさびてて、よくあるガスタンクとか下水場のタンクみたいだった。きたねえ鉄塔が何本もあったけど、もう百年そのままそこに放置されてるみたいだった。」

冗談みたいに押野は言った。

「薄汚いただの工場だったんだ。あの、頭のおかしいへんなオヤジが働いている、ただの汚い工場だったよ。」

ぼくは実際に自分の目で確かめたわけじゃなかったから、それがどんな光景だったのかわからないけど、押野の説明でほとんど想像できた。ぼくは、ますます押野に申し訳ないような気持ちになった。

あのととき勇気を出して、⑥「ぼくも一緒に見にいけばよかったと思った。あの男の人に首をつかまれたとしても、見にいけばよかったのだ。」

「がっくりー、って感じだよ。」

「うん。」

「想像してたのとまったくちがったよ。ばかみたいだ。」

ばかみたいじゃない、と言いたかったけど、言えなかった。

「あーあーあー。」

⑦ 見にごなけりやよかつたな、自分だけに言うような小さい声で押野は言った。

最初の雨が、テトラポッドにしみをつけた。

(椰月 美智子「しずかな日々」より)

(注1) 「一瞥」……ちらつと見ること。

(注2) 「スクラップ」……金属の切りくず。また、自動車などの大きな金属製品の廃物。

(注3) 「テトラポッド」……消波ブロック。海岸や河川などの護岸や水制を目的として設置するコンクリートブロック。

問 一、——線①「おもちゃ工場」はどのような工場だと「ぼく」は考えていますか。文章中の言葉を使って二十五字以内で答えなさい。

問 二、——線②「ぼくたちは、足早に向かった」とありますが、このときの「ぼく」と押野の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、高揚感 イ、緊張感 ウ、焦燥感 エ、責任感

問 三、——線③「思った」の主語を答えなさい。

問 四、

A

C

にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、向こう側を見せてください。

イ、向こう側を見てきてください。お願いします。

ウ、なんの工場か教えてほしいんです。お願いします。

エ、学校や家族に知られたくないんです。ごめんなさい。

オ、ここはなんの工場ですか？

カ、ここはなんの工場になるんですか？

問 五、

線④「呆然」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、状況がのみこめず途方に暮れるさま。

イ、事態に対応しようと考えるさま。

ウ、責任を感じてあせっているさま。

エ、気が抜けてぼんやりしたさま。

問 六、

線⑤「ぜんぜん思ったのとちがってた」とありますが、それはどういうことですか。具体的に説明した次の文の空欄にあてはまる言葉
葉を文章中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

1、十三字

だと思っていた建物は、

2、八字

だったということ。

問七、——線⑥「ぼくも一緒に見にいけばよかった」とありますが、このときの「ぼく」の気持ちの説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、押野を見返すことが出来なかった自分のふがいなさを、残念に思う気持ち。
- イ、押野の期待にまったく応えることが出来なかった自分の弱さを、嫌悪する気持ち。
- ウ、押野を引き留めることも守ることもできなかったことを、悔しく思う気持ち。
- エ、押野だけを現実に向き合わせてしまったことを、無念に思う気持ち。

問八、——線⑦「見にくなりやよかつたな」とありますが、押野がそう思ったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、子どもの夢をかなえるために訪れた場所で、大人たちに拒絶されたから。
- イ、二人の夢を打ち砕かれたうえに、嫌な思いをすることになったから。
- ウ、思った以上にえだいちが頼りないということに、気づいてしまったから。
- エ、えだいちの目の前で、自分の浅はかさを見せることになってしまったから。

問九、文章中からわかる、「ぼく」の気持ちの変化として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、興奮 ↓ 執着 ↓ 混乱 ↓ 失望
- イ、興奮 ↓ 困惑 ↓ 憎悪 ↓ 後悔
- ウ、期待 ↓ 恐怖 ↓ 安堵^{あんど} ↓ 後悔
- エ、期待 ↓ 憎悪 ↓ 安心 ↓ 失望

Ⅲ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本人の道の記憶の仕方、あるいは場所の記憶の仕方。そういったところでの確かな目安、当てにできる目印というのが、日々の光景のなかになんだんになくなってきました。① 地下道はそうです。風景をもたない地下道では、地上にでるのには、Aの3と書かれた出口の階段を上るとか、どの建物のなかに入ると書かれた出口をでる。

目安はぜんぶ言葉、すべて記号です。地上であれば、陽の差す方向を見れば、西か東か北か南か、およその時間の見当もつくけれども、地下道では、周囲の風景がいま、ここを語るといことはしません。ですから、知らない街だったりすると、自分のいるところの見当もなかなかつかれないことがあります。

記憶というのは具体的な目安が手がりなのです。しかし、今日わたしたちの記憶の仕方には、必要な目安というものがなくなっているのではないか。今の情報の時代で、ありあまる情報がわたしたちを取り囲んでいる。そう思っている、ほんとうの話、ありあまる情報にはむしろ具体的な目安が、驚くほどなくなっています。そう思えるのです。

(中略)

情報で肝心なのは、それが新しい情報であるということ。ですから、それは絶えず更新され、新しくされなければならない。ただ② 問題は、絶えず新しくされてゆかなければならないために、情報というのは人の記憶の目安にはならないということです。人の記憶の目安というのは、そこに変わらざるものことです。

(中略)

記憶の目安を確かにするのは、ひとが心のなかにもつ問題です。

ひとの記憶の目安となるのは、自分の言葉を見つけたという思いがそこにのこっているような時と場所のことであり、そうして、自分の言葉を見つけないことは、自分の心のなかにもつ問題を③ みずからいま、ここに確かめる、確かめなおすということだからです。

読書というのは、実を言うと、本を読むということではありません。読書というのは、みずから言葉と付きあうということ。みずから言葉と付きあって、わたしたちはわたしたち自身の記憶というものを確かにしてきました。

記憶を確かにするということは、自分がどういう場所において、どういうところに立っているか、東西南北を知ることです。

心のなかにもつている問題がある。どういう問題かという、わたしたちは心のなかに、言葉にできない、あるいは言葉に言い表せない、なかなかかたちにならない問題をもっている。

それは言葉でははっきりと言えないし、かたちもはっきりとわからないけれども、そこに問題があるということは、はっきりと感ぜられるし、

はつきりと自覚してもいる。そういう心のなかにもっている問題を、自分で自分にちゃんと指さすことができるかどうか。そのことが人の言葉との付きあい方の深さを決める、そう思うのです。

④ 自分ではなかなか気づかない。実際にある言葉を口にして、その言葉で何かを言い表そうとして、どうしてもその言葉で言い表せない、あるいはその言葉で言い切れない、その言葉の外に余ってしまうものがあると感じる。その感じをくぐるうちに、自分の心のなかにある問題を発見する。そのように、言葉で言えない、かたちはとりにくいけれども、はつきりそこにあると感じられる問題というものを、一つずつ自分の心のなかに見出してゆくということが、ひとが成長すること、歳をとるといふことだろうといふふうに、わたしは思っています。

言ってみれば、自分の心のなかにもっている問題の数というのは、ちょうどその人の年齢にひとしいのでないか。逆に言えば、年齢というのは、その人が自分の心のなかにもっている問題の数ときつとおなじだ、と思うのです。

言葉で言い表すことができないものがあるというのは、言葉というのには表現ではないのでないかということですが。

言葉は、ふつう表現と考えられています。A、本当はそうでなく、言葉はむしろどうしても表現できないものを伝える、そのようなコミュニケーションの働きこそをもっているのではないかということを考えるのです。

言葉というのはその言葉で伝えたいことを伝えるのではない。B、その言葉によって、その言葉によっては伝えられなかったものがある、言い表せなかったものがある、どうしてもこつてしまったものがある、^⑤ そういうものを同時にその言葉によって伝えようとするのです。

おなじ一つの言葉でも、その言葉でおたがいがもっているのは、おなじ一つの意味ではありません。C、「社会」というような言葉。その「社会」という言葉は、車を指して、「これは車です」とか、松の木を見て、「これは松の木です」といふふうに、そこにあると指して言うことができます。

「これは社会です」と何かを指して言うことのできない、そういう言葉があります。そのような言葉で言い表されるものというのは、その言葉によつてそれぞれが自分の心のなかに思いえがくものことです。

ですから、それは、それぞれに違います。そうであつて、それは、おなじ一つの言葉です。その言葉によつて自分の心に思いえがいたものを伝え、そして同時に、その言葉によつて言い表すことのむずかしかったもの、むずかしいものを伝える、そういったコミュニケーションのあり方を大事にできなければ、何か大事なものが、気づかぬままに人と人のあいだから脱落していつてしまします。

コミュニケーションと言うと、情報をとること、交換することがコミュニケーションであるように考えられやすいけれども、情報とコミュニケーションというものはDするものではなくて、ほんとうは反Dする性質をもっています。

情報がふえればふえるほど、逆にコミュニケーションはすくなくなくてゆく。あるいは、浅く、小さくなくてゆく。「知らなきゃ話になんない」という言い方があるように、知るものと知らないものを、情報は分けてしまう。おたがいのあいだに、知っていなければお話にならない(注)ディスコ

コミュニケーションの状況を、情報は現出させるのです。

コミュニケーションは情報によって代替できないことを、もつとも対照的に示すものは、読書のコミュニケーションのあり方です。

読書というのは、どういうコミュニケーションなのか。読書のコミュニケーションというのは、言葉のコミュニケーションですが、言葉のコミュニケーションというのは、答えの決まっているもの、こういう問題があつて、それに対してこういう答えがあるというような、模範回答があるというコミュニケーションとは違います。

その反対に、それは答えの決まっていない、あるいは答えというものがない、答えはないけれども、問いがあり、問いはさらなる問いを問い、問いを求めて答えを求めない、ある意味で落着を求めないコミュニケーションというのが、言葉のコミュニケーションというものだろうというふうに思えます。

読書について言えば、ですから、答えを求めて読むのではなく、ひたすら読む。じっくり読む。ゆっくり読む。⑥ 耳を澄ますように、心を澄まして、言葉を読んでゆくほかに、読書のコミュニケーションはないというふうに、わたしは思いさだめています。

そこに伝えられないものがある。言い表せないものがある。はつきりと感じられているけれども、どうしても言葉にならないもの、言葉にできないままになつてしまうものがある。何かとしか言えないような何かがある。

言葉から、あるいは言葉によって、そうした沈黙、そうした無言、そうした空白というものをみずからすすんで受けとることができるような機会をつくるような、そういったコミュニケーションのあり方を大事にしてゆくことを考えたいと思うのです。

そうした沈黙、そうした無言、そうした空白が体(注2)しているものが、それぞれに心のなかにもっている問題なのであり、なくしてはならない記憶の確かな目安だからです。

(長田弘「読書からはじまる」より)

(注1) 「ディスコミュニケーション」……意思伝達ができないこと。コミュニケーションが絶たれた状態。

(注2) 「体して」……心にとめて守って。

問一、——線①「地下道はそうです」とありますが、これはどういうことですか。その内容を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章の中から指定された字数で探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

地下道には、その場所を 1、二字 するのに欠かせない、2、三字 で 3、五字 がないということ。

問二、——線②「問題は」の述語を次から選び、記号で答えなさい。

ただ問題は、絶えず ア 新しくされてゆかなければ イ ならないために、情報というのは人の記憶の目安には ウ ならないという エ ことです。

問三、——線③「みずからいま、ここに確かめる、確かめなおす」の言い換えになっている部分を文章中から十三字で探し、抜き出して答えなさい。

問四、——線④「自分ではなかなか気づかない」とありますが、何に「気づかない」のですか。——線④より後の文章中から四十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問五、A C にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、たとえば イ、しかし ウ、つまり エ、むしろ

問六、——線⑤「そういうものを同時にその言葉によって伝えようとする」とありますが、何と何を「同時にその言葉によって伝えようとする」のですか。——線⑤より後の文章中にある言葉をできるだけ使い、三十五字以内で答えなさい。

問七、D にあてはまる熟語を二字で考えて答えなさい。

問八、——線⑥「耳を澄ますように、心を澄まして、言葉を読んでゆくほかに、読書のコミュニケーションはない」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、読書とは言葉のコミュニケーションであり、それを成立させるためには日々変化する情報に常に敏感でなければならないから。
- イ、読書によって答えのない問いに答えを出すためには、模範回答のない言葉のコミュニケーションを行うだけでは不十分だから。
- ウ、表現できないものを伝えようとする言葉のコミュニケーション同様、読書も問いに対する決まった答えがあるわけではないから。
- エ、言葉のコミュニケーションでは伝えきれないことも、読書を通して様々な情報を手に入れることで伝えられるようになるから。

問題は次ページに続きます。

④ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章中の①～⑥は形式段落の番号を示しています。

① 「今年は真人間まにんげんになって、まじめに働きます」。怪しげな年賀状がどこやらの刑務所から届く。検印の欄には「犬井」「犬塚」「犬飼」と看守ら3人のハンコが。どれもイヌ年にちなんだ。

② 1970年の正月、画家安野光雅あんのみつまささんが送ったあいさつ状には、だれもが腰①を抜かした。そんな遊び心が彼の創作の原点である。意表を突くだまし絵は国内外で愛された。「三次元では起きないことが二次元なら起きる。見る人を驚かせたい」。そんな安野さんが94歳で亡くなった。

③ ② 世界各地の風景を描いた絵本にはヒーローを小さく配するしかけも。「スーパーマンをどこに描いたか教えて」。ある時、米国の子どもから手紙が届く。返信は「自分で探す方が楽しいよ」。読み手に自分の目と頭で考えてもらう手間を大切にした。

④ A 画風とはうらはらに、画業は順風続きではなかった。島根・津和野の宿屋に生まれ、工業学校を卒業した後に炭鉱へ。戦後は教師として小学校に10年ほど勤めた。絵描きの道に歩みを定めたのは30代半ばだった。

⑤ 『あいうえおの本』『10人のゆかいなひっこし』。子育ての時期、わが家も彼の絵本にお世話になった。ひらがなやABC、足し算を教えるのに謎かけのような絵を駆使して退屈させない。子にも親にも驚きの教科書だった。

⑥ 絵筆のみならず文章の筆も柔らかかった。『散語拾語』『私捨悟入』という書名にも安野③さんらしさがあふれる。絵画も文章もそして賀状でも永遠の空想少年であり続けた。

(朝日新聞「天声人語」より)

問 一、——線①「腰を抜かした」とありますが、これと同じ意味を表している言葉を③以降の文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問 二、——線②「世界各地の風景を描いた絵本にはヒーローを小さく配するしかけも」とありますが、安野さんが自らの作品にこのような「しかけ」をしていたのはなぜですか。「ため」に続くように、文章中から二十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問三、Aにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、華やかな
- イ、真面目な
- ウ、穏やかな
- エ、上品な

問四、——線③「安野さんらしさ」とありますが、それはどのようなものですか。文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問五、この文章の構成として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。



